

ワシントンハイツ

佐々木隆

プロローグ

戦後の日本における欧米文化の流入では米軍の駐在、その後駐在米軍の住居として日本各地にこうした外国人居留地が誕生している。横浜の居留地では戦後かぼちや祭りが開催されたが、これが実は日本におけるハロウィーンの受容の先駆的な役割を果たした(一)。ハロウィーンと言えば一九八三年に本格的なパレードが開催されたのが原宿キデイルンド主催のハローハローハロウィンパレードであった。キデイルンドがハロウィーンに関心を持つようになった契機はワシントンハイツの住民との交流にあった(二)。本稿ではこのワシントンハイツについて取り上げる。

一 ワシントンハイツ

ワシントンハイツ (Washington Heights; U.S.

Air Force Washington Heights housing complex)

は、敢えて日本語表記すれば合衆国空軍ワシントンハイツ団地とでもなるうか。第二次世界大戦敗戦後の日本にお日本を占領していた連合国軍の一部であるアメリカ軍が東京・代々木に有していた軍用地である。そこには兵舎・家族用居住宿舍などがあった。一九四六年に建設され、東京オリンピックが開催された一九六四年に日本に返還された。移転費用はすべて日本が負担した。跡地は現在の代々木公園、国立代々木競技場、国立オリンピック記念青少年総合センター、NHK放送センターなどがある。

一九五三年一月の記事としてワシントンハイツにはアメリカ人三千人の住んでいたという(三)記事の中で日本に来て半年ばかりの一将校夫人のイン

タビユーが掲載されている。

日本好きだ。あだいワシントン・ハイツはきらいだ。住居があまりに劃一的で型にはめられている。子供の遊び場ない(四)。

子供に関しては「一千人に近い生徒の学校(臨時八年制)幼稚園」(五)とある。このワシントンハイツについては「ここを建てるとき日本人が、これがアメリカ式だと思つてアメリカ人を喜ばせようとした」(六)とあり、全くアイデアが違うとある。

残念ながら窪川鶴次郎「ワシントン・ハイツ」にはここでの子供達がどのように遊んでいたのか、何が楽しみであったかなどは全く書かれていない。駐在米軍の家族がここで暮らしの様子的一端が見て取れる。



(七)

書名になつている本書が目に入り、頁めくることになつた。しかしながら、本来目的としていたワシントンハイツでのハロウインの記述については見当たらなかつた。そこで、ワシントンハイツでの生活ぶりなどからハロウイン、あるいは子ども遊びの中からハロウインにつながりそうな記述を見出してみた。

二 秋尾沙戸子『ワシントン

ハイツ GHQが

東京に刻んだ戦後』

(二〇〇九)

ワシントンハイツを扱

つた文章はそれほど多いとは言えないだろう。ワシントンハイツがそのまま

片岡義男「解説」には次のような記述がある。

ワシントンハイツは一九四六年の七月に起工され、次の年の九月に完成した。九種類の色彩が、八百二十七戸の外면을塗り分けたという。統一された色彩計画の目的は、見た目の単純さ退屈さを回避するためだった。屋根は材料の色をそのまま色彩とした。平屋の一戸建てはどちらかといえば少なく、多くは何人かいてので、十代の僕は頻繁にこのハイツへ遊びにいった(一八)。

片岡はワシントンハイツの誕生から消滅の概要を次のように記している。

日本国内で材料を調達し、日本の工法を尊重しつつ、多くの日本人を参加させて建設されたワシントンハイツは、一九六一年には東京オリンピック

クのために使用することが決定され、一九六三年には接收が全面的に解除された。ワシントンハイツの機能は、調布・府中・三鷹にまたがる地域に、あらたに建設されたアメリカ軍施設に移転した。接收を解除されたワシントンハイツは、一九六四年の東京オリンピックでは選手村として使用され、次の年、一九六五年には、あらわれたときとおなじく、忽然と消えた(一九)。

以降はこのワシントンハイツでの暮らし、子どもの生活等に関わる内容のものを取り上げておきたい。

空襲で店舗が焼失し有楽町で仮営業していた「紀文」が名前を変え再び青山で商売を始めたとき、その木造の店内には新鮮な生野菜が並んだ。戦前はどく限られた上流階級にしかなかった生野菜を摂る習慣は、そこから一般の人々に広がっ

たいった。

この東京都指定、「洗淨野菜販売店」第一号がオープンしたのは、昭和二十四年二月十六日のことであった。従来の店舗のように、店先に商品を並べることはない。締め切った店の窓はガラス張り、扉には網戸を使っていた。店内にハエが飛んでいては、米軍の衛生検査のコードに引っかかる。ここに並ぶレタスなどの野菜は、化学肥料のみで栽培されていた。

車を運転すること数分。「紀ノ国屋」に、「ワシントンハイツ」に暮らし始めた米軍将校の妻たちが殺到したのはいうまでもない。ハイツの中にあるカミサリ（食糧品店）よりも、はるかにパリティとしたレタスやセロリなどが手に入る。

その後、「紀ノ国屋」はアメリカ製のキャッシュ・レジスターを導入する。セルフサービスの第一号店として日本では知られることになる〔五〕。

「紀ノ国屋」については、港区ゆかりの人物データベースでは創業者の「増井徳男」のところで次のように述べている。

日本で初めてのスーパーマーケット「紀ノ国屋」を北青山にオープン

昭和24年、果物と清淨野菜を扱う小売店として北青山3丁目の現在の場所に再建された店舗は、その4年後に日本初のセルフサービス方式のスーパーマーケットとして生まれ変わりました。当時まだ珍しかったガラスのウインドウで仕切られた店内には、レジスター、ショッピングカート、クラフト紙の紙袋、新鮮な野菜やアメリカ産の缶詰などが豊富に並べられ、人々の羨望を集めました。当初は在日アメリカ人のお客がほとんどでしたが、その後日本初のインスタ・ベーカーリ

ーの開設、空輸したナチュラルチーズの販売、健康に配慮し吟味された調味料など、増井の先見的なアイデアによる品揃えが日本人の間でも評判を呼び、高級食料品店「紀ノ国屋」の名を高めていきましました。

今では青山の店舗は「紀ノ国屋インターナショナル」として、洗練されたスーパーマーケットの草分け的存在となっています（十二）。

ワシントンハイツはどのような家であったのか。

日本のスタッフがモダンなスチール家具を提案する却下された。たとえばスチールパイプを用いた椅子をデザインすると、クルーゼはこう反応するのだった。

「アメリカ人は兵器めいた家具で暮らす気なんて毛頭ない。木の椅子、木のテーブル、木の家具

が欲しい」（十三）

ワシントンハイツには唯一日系人としてジョン・ヒロム・キタガワ（一九三一〜二〇一九）が住んでいた。ジャーニーズ事務所創業者のジャーニー喜多川である（十三）。父親がプロ野球のコーチをしていたこともあり、ワシントンハイツで近隣の日本人の少年を誘いワシントンハイツで野球をしていたようだ。また、ワシントンハイツの近く住んでいたのはジャズ・トランペット奏者の日野皓正（一九四二生）であった。

彼が米軍キャンプで演奏を始めるのは、外苑中学に入学してからのことである。千駄ヶ谷から明治神宮の北にある代々木に引っ越していた。家から見えるほどの距離にあるワシントンハイツにあったクラブのステージに立つことはないが、

出入りはしてという。タツプのユニット「日野ブラザーズ」として父と弟がワシントンハイツでのショーに出演していたからだった^(十四)。

ワシントンハイツの住民がおそらく利用したであろう土産店や雑貨店が原宿の当時からあった。オリエンタル・バザール、キデイランド、本を中心にした山陽堂書店があった。山陽堂書店は一八九一創業である^(十五)。キデイランドについては次のような記述がある。

当時の日本玩具は、アメリカへの輸出の中でも上位にランクされていた。リモコンカーなど、ドイツに次いで、精巧な玩具と評判だった。そうした輸出向け玩具を仕入れてワシントンハイツの家族相手に販売していたから、よく売れた。従業員は一反風呂敷に包んだ商品を背負い、仕入れ先

の浅草橋と原宿とを毎日のように往復した。

店の名を「キデイランド」と変えたのは、昭和三十三年のことである。そのころはまだ木造二階建てで、一階が店舗、二階は商品倉庫と住宅だった。間口中央部が出入り口、その左右は総ガラス張りのショーウィンドーで、道路から店内が一望され、注目を集めた。

「アメリカの子どもたちだけで、原宿や表参道のあたりには、よくでかけてましたね。キデイランドは少し値段が高かったけど、面白いおもちゃが置いてあった。でも、自分で買うときには、もっと安い小さな店に行きましたよ」

こう語るのはマークフクハラ氏である。彼が父について日本を訪れたのは昭和三十一年夏のことだった。その頃になると、表参道にはワシントンハイツの子どもたちのために、いくつかのトイショップが店を開いていた。

「マーブル（おはじき）やメンコ、それに花火も買ったなあ。あと、包み紙まで食べられるガムとかキャンディとか、明治チョコがおいしかった」のを覚えていますよ」

差別化を狙ったキデイランドはその後、「メイド・イン・アメリカ」の玩具に絞り、日本の子どもたちを魅了していくことになる^(十六)。

キデイランドも時代と共にその取り扱う玩具等が変容しているのもビジネスとして

三 ワシントンハイツとキデイランド

ワシントンハイツとキデイランドは「子ども」をキーワードにして繋がっているようだ。そこでキデイランドの社史、『夢の宇宙誌 キデイランド15年』（一九九二）を見ておきたい。この社史は国立

国会図書館にも所蔵されていない^(十七)。

明治神宮の南側一帯は、もとは代々木練兵場であつたが、敗戦とともに、アメリカ軍が接收してしまい、そこに将校や下士官クラスの軍人のための住協団地をつくり上げていた。『ワシントン・ハイツ』と呼ばれたその団地は、広さ約91万㎡。病院や学校、教会、さらには劇場からテニスコート、ゴルフ場まで備えていた。

戦争が終つ間もなく、『週刊朝日』にチック・ヤングのコミック『ブロンデイ』が連載され、人気を博した。アメリカの中流家庭の生活を描いたそのコミックは、多くの人々の夢の風景でもあつた。フェンス越しに見えるワシントン・ハイツ、ブロンデイとアメリカ文化が、そつくり引越してきたようなものであつた^(十八)。

当時の様子も紹介されている。

28年11月、書籍部門を分離させて竹下店が生まれ、1年後には、全従業員も30名ほどに増え、店も有限会社のかたちをとった。

やってくるのは、ほとんどが外国人であった。店内には英会話が飛び交い、女子店員も英会話が必修とされた。特に9月から10月にかけては、本国の知り合いに船でプレゼントを送ろうという人々が詰めかけ、店内は外国人で埋まり、英会話が渦巻いた。リンカーン、キャデラック、ビュイックなどの大型アメリカ車で乗り付けた人々が山のようにプレゼントを買い込んでいった。まるで、アメリカのどこかの街角のような風景が、来る年ごとに繰り広げられていった。1ドル＝360円の時代、アメリカ文化は、まだ夢の彼方の世界であった(十九)。

キデイランドは早くからワシントンハイツとのつながりがあったようだ。倒産の危機を迎えた時に次のような思いがあったという。

特にキデイランドの場合はワシントンハイツの外国人がよくおもちゃを買いにきていましたから、それらの人たちの行き場がなくなってしまう(二十)。

キデイランドのホームページでも次のように掲載されている。

① 原宿・表参道のランドマーク
キデイランドは一九四六年(昭和二十一年)に埼玉県秩父にて創業(橋立書店)後、創業者の橋立孝一郎氏の幼少時代を過ごした原宿に戻り

一九五〇年（昭和二十五年）に現在の表参道の地に書籍店舗を構えました。当時は終戦直後で日本は占領軍の統治下にあり、現在のJR原宿駅の西側の代々木公園、代々木体育館、NHKのある広大な敷地一帯（二十七・七万坪）は、そうした占領軍将校たちの居住区域（ワシントンハイツ）として八〇〇世帯以上の洋風家屋が建ち並び、多くの外国人が暮らしていました。キデイランドにはそうした事情から、書店ではありませんでしたが、外国人顧客の要望に応え洋書や外国人向けの雑貨を早くから取扱い、中でもクオリティの高い日本の玩具が店舗のメイン商材となっていました。

店舗の名前も外国人に馴染みやすい呼称として昭和三十年くらいから「キデイランド（子どもの国）」を使用しており、表参道の中では早くから繁盛店として認知されてきました。

ワシントンハイツ自体は日本人立入禁止エリアでしたが一歩出た表参道は、もちろん日本人も出入り自由です。場所柄外国人が多かったのですが新しいモノ好きの特に時代の先端を行く当時の日本人の若者もたくさん表参道にやってきました。キデイランド原宿店から発信された情報をキャッチしていき、日本人にも絶対的なブランドとして愛されてきました。キデイランドはこのように長い伝統の中で表参道のランドマークとして存在してきており、原宿・表参道の地図には必ず目印として記載されてきており、まさに原宿・表参道のシンボリックな存在としてブランド価値を高めてきました^{二七}。

有名人もこのキデイランドを訪れている。

昭和54年6月、第5回先進国首脳会議・東京サ

ミットが開かれ、6月24日、アメリカのカーター大統領が来日した。大統領とともに日本を訪れた愛娘のエミーちゃんは、日本の休日を楽しみながら、26日に原宿店を訪れ、ニコニコ顔でショッピングを楽しんだ。キデイランドがすっかり気に入ったエミーちゃんは、名残惜しそうに帰っていったが、翌7月、キデイランドにお礼の手紙が寄せられた(二七二)。

マイケル・ジャクソンも一九八七年九月十一日に原宿店を訪れている(二七三)。その後もスウェーデンのグスタフ国王陛下、タイ王国のテュラポーン王女も二人のお子様を連れて来店している(二七三)。

今やキデイランドは原宿を代表するポップカルチャー発信の店舗である。日本人もそうであるが、外国人もよく見かける。

エピソード

ワシントンハイツでハロウィーンパーティーが開かれていたという記録はないかと期待していたが、そこに行きつくことはできなかった。しかし、ワシントンハイツだけでなく、戦後の日本の米軍基地や外国人居留地がアメリカ文化発信の役割を果し、底に住む人達と日本人の交流からアメリカ文化を感じることもあったであろう。

筆者はハロウィーンの日本における受容も取り扱っているが、米軍基地や外国人居留地にもっと注目すべきではないかとのヒントを得た。横浜はすでにこうした影響があることが明らかであり、他の地域についても機会があればリサーチしていきたい。

- (一) 本牧本牧の会あゆみ研究会編『本牧のあゆみ』(新本牧地区開発計画局開発部新本牧開発室、一九八六年六月)、九十二頁。
- (二) NHK総合・首都圏情報ネタドリ
「『史上最大』の厳戒態勢 渋谷ハロウィンに潜むリスクとは」(二〇二四年十月十七日/十月二十八日再放送)のコメントライターとして録画出演したが十月十四日の事前取材で原宿キディランドを訪れ、その際に、ワシントンハイツの子供達を喜ばせることを契機として、これが拡大し一九八三年にハロウィンパレードに発展したことが分かった。
- (三) 窪川鶴次郎「ワシントン・ハイツ」(井上友一郎編『東京通信』黄土社、一九五四年五月)、二六六頁。
- (四) 同書、二七六頁。
- (五) 同書、二八〇頁。
- (六) 同書、二七七頁。
- (七) 「フォトギャラリー一枚目 ジャニー喜多川氏も住人だった「ワシントンハイツ」の全貌「FRIDAY デジタル」」
<https://friday.kodansha.co.jp/article/63115/photo/5f6c939d>(二〇二三年十二月二十八日アクセス)
- (八) 秋尾沙戸子『ワシントンハイツ GHQ が東京に刻んだ戦後』(新潮社、二〇〇九年八月)、五四一～五四二頁。
- (九) 同書、五四三頁。
- (十) 同書、一六六頁。
- (十一) 「増井徳男」
<https://www.lib.city.minato.tokyo.jp/yukari/j/man-detail.cgi?id=86>

Accessed 8 Jan. 2024.

(十二) 秋尾沙戸子『ワシントンハイツ GHQ
が東京に刻んだ戦後』、二一九頁。

(十八) 株式会社気キデイランド編『夢の宇宙誌
キデイランド15年』(株式会社キデイランド、
一九九一年三月)、八〇九頁。

(十三) 赤岩州五『新宿・渋谷・原宿 盛り場の
歴史散歩地図』(草思社 二〇一六年七月)、
九十二頁。

(十九) 同書、十〇十一頁。
(二十) 同書、一〇二、一〇四頁。
(二十一) 「キデイランド・ブランドの魅力」

(十四) 同書、二二九～二四〇頁。

<https://www.kiddyland.co.jp/pr/images>

(十五) 「山陽堂書店」

/corp2014_1pver0_301.pdf. Accessed

<https://sanyodoshoten.co.jp/history/>

25 Jan. 2024.

<index.html>. Accessed 23 Jan. 2024.

※縦書きのため算用数字を漢数字に改

(十六) 秋尾沙戸子『ワシントンハイツ GHQ

めた。

が東京に刻んだ戦後』、二八三～二八四頁。

(二十二) 株式会社気キデイランド編『夢の宇宙誌

(十七) 注(二)の取材後、株式会社キデイラン

キデイランド15年』、三十九頁。

ド営業部・荒木豊様よりメールを戴き、研

(二十三) 同書、五十五頁。

究の一助なればということから同社史の

(二十四) 同書、五十六頁。

PDF化したデータをご提供戴いた。紙面

を借りて深く感謝申し上げます。

※「ワシントンハイツ」については「ワシントン・

「キデイランド」については「キデイ
ランド」と記述しているものがあるが、筆者はそ
れぞれ前者で統一し、引用文献についてそのま
まの表記を採用している。